

山形県酒田市生石2遺跡発掘調査概要報告2

Overview on Archaeological Excavation of the Oishi 2 Site in Sakata City, Yamagata Prefecture, Vol.2

青野 友哉 AONO Tomoya

渡部 裕司 WATANABE Yuji

要 旨

本稿は山形県酒田市生石2遺跡の第2次調査の概要報告書である。本年度は、2020年度調査区(標高14m)の東方約50m、標高15.5~16mの地点を3箇所試掘した。試掘調査の結果、古代の遺物の出土と柱穴1箇所を検出したことから、耕作による攪乱はあるものの古代の遺物包含層が残存していることがわかった。弥生時代の遺物包含層は調査範囲が狭かったこともあり確認できなかった。

1. 研究の目的

東北芸術工科大学では2020年度から「庄内地方の特性に基づく遺跡・遺物の活用の研究」を開始し、縄文~弥生時代を対象にした遺跡の調査・研究と現代における活用方法を探ることとしている。

本報告は上記の計画のうち2022年8月に実施した生石2遺跡の試掘調査について概要を記したものである。なお、2021年度はCOVID-19の感染拡大防止の観点から発掘調査を中止したため、本年度が第2次調査となる。遺跡の概要については既刊の概要報告(青野他 2021)に記載しているため、本稿では省略している。

2. 調査要項

遺 跡 名: 生石(おいし)2遺跡

登 載 番 号: 204-041

所 在 地: 山形県酒田市生石字登路田9-20,7-1,7-4,8-2

調 査 主 体: 東北芸術工科大学(学長: 中山ダイスケ)

発掘担当者: 青野友哉(東北芸術工科大学)

調査参加者: 東北芸術工科大学歴史遺産学科1年: 菅 凛歩・川上 茉央、2年: 石川 諒・堀籠 光太郎・門間 匠・村田 憶人・中村 悠河・前野 日和・高橋 望・岸柳 壮大・永沢 駿・下嶋 壮汰、3年: 山田 幸風・川瀬 理子・丹 郁弥・田代 絃太・渡邊 心乃美、大学院修士2年: 鈴木 大翔、保存修復研究センター職員:

野場 知聡

調 査 面 積: 10㎡(2m×1m×3箇所、2m×2m×1箇所)

調 査 期 間: 2022年8月22日(月)~8月25日(木)

出土文化財: 土師器・須恵器

出 土 数 量: 1箱〔内寸679×367×122mm〕

3. 発掘調査の方法

2022年度の調査区は東平田コミュニティ防災センターの東側の休耕地(芸工大2区)とし、遺跡の範囲確認と内容の把握を目指した。トレンチの規模は2m×1mとし、20m間隔で設置した(図1・図2)。また、2020年度調査の際に弥生土器が1点出土したテストピット3の土層断面図が未作成であったため、再度掘削して図化を行なった。場所は国道345号線とコミュニティセンターの間(芸工大1区)で、調査範囲は2m×2mである。

掘削はすべて人力とし、表土層はスコップで行い、遺物包含層に達してからは移植ゴテで行なった。遺物は遺構に伴うものは出土位置を記録したが、その他の土器は層位ごとに一括して取り上げた。

4. 発掘調査の方法

各テストピットの調査結果は以下の通りである。遺構が検出されたのはテストピット5の柱穴のみであった。

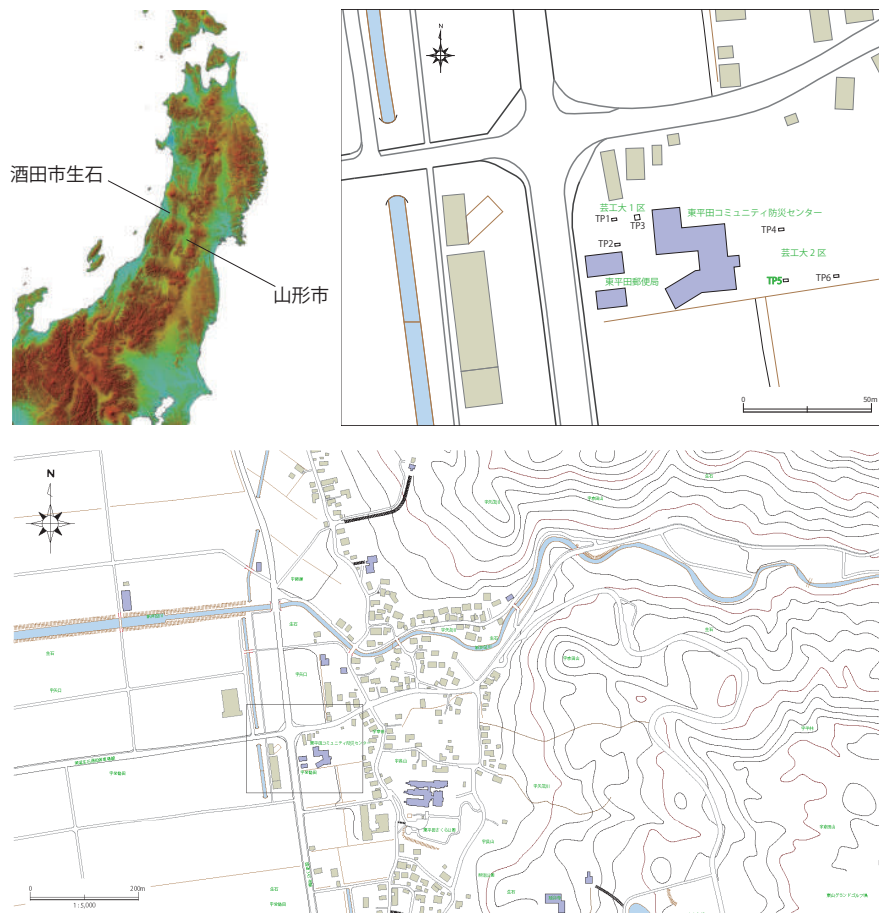


図1 酒田市生石2遺跡の位置(電子地形図(国土地理院)を加工して作成)

(1)テストピット4(図3、写真5)

2m×1mの範囲を掘削すると暗茶褐色粘質土(1層)と黒色粘質土(2層)が水平に堆積しており、現代の水田耕作土と判断した。4層以下は拳大の円礫を多く含み、多量の水が湧き出した。遺物は2層から摩耗した土師器が比較的多く出土した。

(2)テストピット5(図3、写真2・6)

土層は茶色土(1層)と茶褐色土(2層)が水平に堆積しており、下位の暗茶褐色土(3層)とは不整合な面が見られることから、1・2層は現代の水田耕作土と判断した。3層を徐々に掘り下げつつ、4層上面で精査すると、トレンチ中央部に直径20cmの円形の落ち込みを確認した。これを半裁掘削すると西側に直径10cmの柱痕跡を確認し、柱穴と判断した。3層及び柱穴の周辺からは土師器片が出土しており、古代の遺構と思われる。

下部の様相を探るために南壁側に幅20cmのサブトレンチを設けて掘削したところ、シルト層が互層をなしており、水性堆積であることがわかった。遺物は5・6層から土師器・

須恵器片は数点出土するものの、弥生時代以前の遺物の出土はなかった。

(3)テストピット6(図3、写真7)

テストピット6は同4・5よりも一段高い現代の水田面にあるため、約50cm標高が高い。褐色砂質土(1層)と茶褐色粘質土(2層)は水平に堆積し、3層との間が不整合面となっているため、現代の水田耕作土である。

3層・4層はシルト層で水性堆積と思われる、水平に堆積する5～8層を侵食した痕跡が確認できることから、トレンチの東半分は流路が存在したと思われる。ただし、人為的な遺構か自然流路であるかは不明である。遺物は2層で須恵器片が数点出土しているが、下位の層からの出土はない。

6. 成果と課題

2022年度の発掘調査では、標高15.5～16mの位置から古代の遺物の出土と柱穴1箇所を検出し、遺跡の範囲がより東側に広がることが確認できた。課題としては弥生時代の遺物包含層の確認ができていない点であり、次年度以降に取り組みたい。

調査・報告にあたり、下記の機関および個人より協力を得た(敬称略)。

庄司はつせ・庄司 博、石井憲吾、酒田市教育委員会、東平田コミュニティ防災センター、東平田郵便局。

参考文献

青野友哉・北野博司・渡部裕司 2021「酒田市生石2遺跡発掘調査概要報告」『歴史遺産研究』第15号. 東北芸術工科大学. pp.51-58

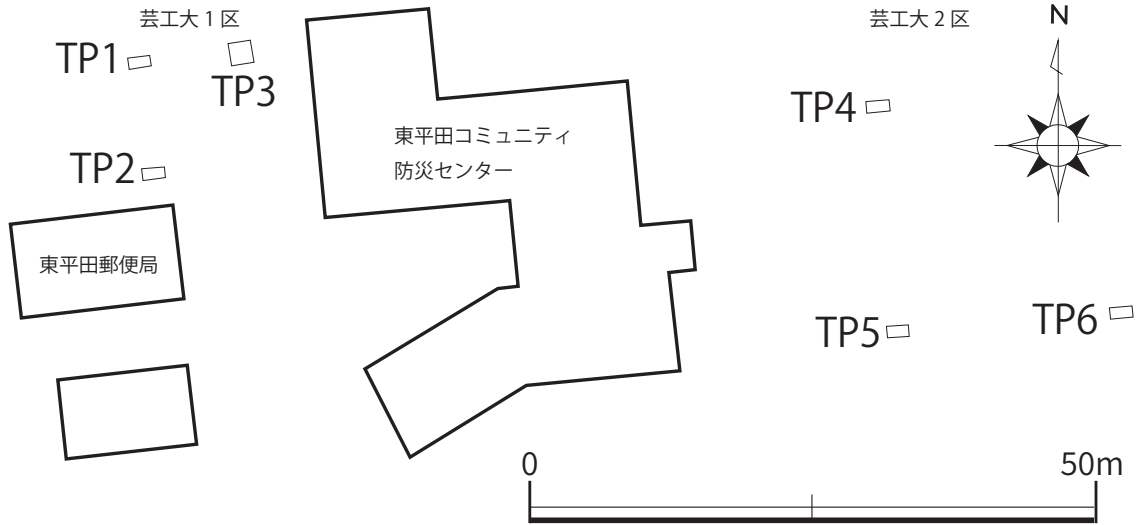


図2 テストピットの配置図(2021年調査:TP1~3、2022年調査:TP3~6)

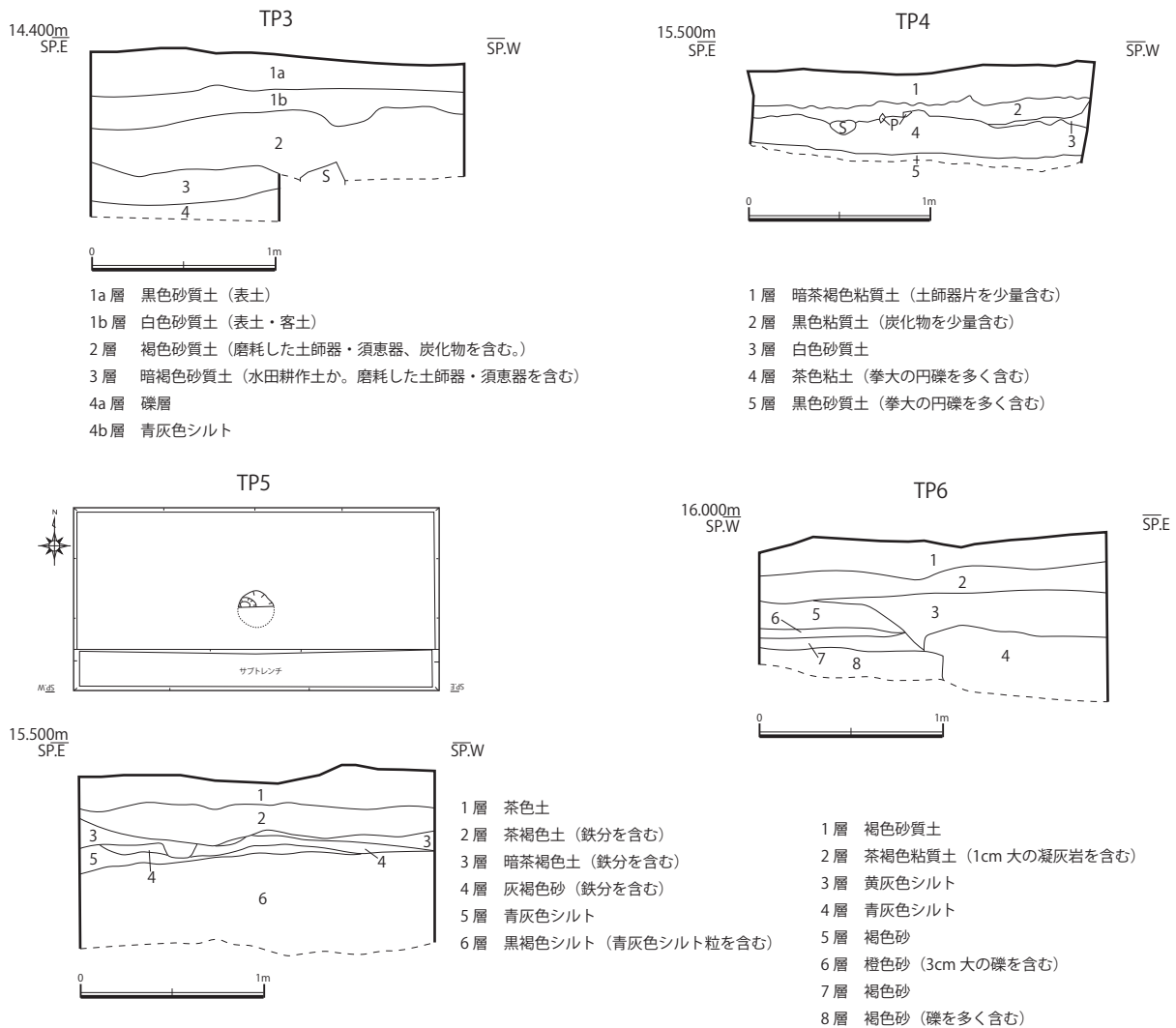


図3 テストピットの平面図及び土層断面図 (TP3~5:南壁、TP6:北壁)



写真1 調査区(芸工大2区・北西から撮影)



写真2 調査風景(TP5・南東から撮影)



写真3 調査風景(TP3・南西から撮影)



写真4 テストビット3の土層断面(南壁面)



写真5 テストビット4の土層断面(南壁面)



写真6 テストビット5の土層断面(南壁面)



写真7 テストビット6の土層断面(北壁面)



写真8 テストビット5出土遺物